

84

●発行者 稲門建築学会会長・村松 映一
 ●編集者 稲門建築会広報委員会（委員長・小菅克己）
 ●発行所 稲門建築会
 〒一六九・八五五五 東京都新宿区大久保三・四・一
 早稲田大学理工学術院5-5-02-01
 電話・ファックス 〇三・三三〇八・〇六四〇
 ホームページ 〓 <http://www.all-waseda.com/rikogakai/roumon.arch/>
 電子メール 〓 toumonji@poppy.ocn.ne.jp
 制作 〓 都市建築編集研究所
 DESIGN: KAKEI GRAPHICS
 ©稲門建築会

March
2009

Waseda Architecture

早稲田建築ニュース

巻頭 一言

平松 剛 [ノンフィクション作家]
苗H4・院H6



磯崎新さんの東京都新庁舎コンペ案を知ったのは、たしか大学4年の秋、東京駅のステーションギャラリーで磯崎さんの大展示会があり、模型や図面がたくさん並ぶ中をグルグル歩いていたら、おもしろい。いったいどこに建つんだろ」とネーム・プレートを確認したところ、それが新都庁舎コンペ案だったので。

かつて低学年の頃、教授の誰だったかは忘れませんが、たまたま出た授業で、「磯崎さんの本ぐらいは最低限読まない」と言われ、大学の図書室に行くと、磯崎さんの著書がズラリ書架に並んでいる。この「並んでい

- 巻頭言 2008年サントリー学芸賞受賞に寄せて……平松剛
- 建築学科創設100周年に当たって……村松映一
- 佐藤功一と早稲田建築の系譜……米山勇
- 座談会「インフラにかかわる仕事」……吉田聡・中北英孝・西村郁夫・原田仁
- 早稲田大学vs.東京大学／早稲田大学vs.日本女子大学
- 熱湯夜話 〇13夜「環境とつながる、ひとつつながる、住まいづくり」……山田寛宏
- 14夜「手の記憶——実測とスケッチ」……遠藤勝勲
- 2008年度「OB」による仕事紹介「大盛況

2008年 サントリー学芸賞受賞に寄せて 「磯崎新の『都庁』」戦後日本最大のコンペ

「磯崎新の『都庁』」というのが曲者です。人気の本は誰か学生が借り出してしまおうので、なかなか図書室で見かけることはない。つまり、磯崎さんの本は大人気ではないのです。案の定、本を開くやいなや、最初の1ページ目からその難解さに何が何やらサッパリわからず、サッサと放り出し、以来、磯崎さんは敬して遠ざける存在となりました。後にステーションギャラリーの展示会に出かけたのは、模型や図面を眺めるだけで、文章を読まずに済む、という気軽さからでした。ところが、そこで出会った新都庁舎案によって、初めて磯崎さんの建築の魅力に触れた気がしたのです。丹下健三の都庁と比べたわけではなく、何の建物なのか知らないまま、図面と模型



「磯崎新の『都庁』」
 戦後日本最大のコンペ
 2008年、文藝春秋。装丁は和田誠氏
 を見て、ひとつの建築として惹かれた。
 「こんなおもしろい建築が、どんなふうに見られたのか？」

必死で勉強したものの、所詮は一夜漬け。難しい話をされたら、どうしよう……。恐怖におのきながら取材に出かけました。けれど、磯崎さんは、その場でたちまち私の脳ミソのレベルを見抜き、難解な言葉を一切使いませんでした。というわけで、この『磯崎新の都庁』、内容は極めて簡単な本に仕上がっております。ぜひ、気軽にご覧ください。



早稲田大学は2007年に創設125周年の節目を迎え、次の125年に向けて新たな一歩を踏み出した。その年、理工学部は基幹・創造・先進理工学部の3学部再編され、2008年に理工学部創設100周年を迎えた。1909年に予科として出発した建築学科は、翌1910年に本科も加わって歴史を刻み、今年は予科創設100年、来年は本科創設100年を迎えることになる。

このように記念すべき年を迎えるに当たって、



鈴木了二教授、大隈記念学術褒賞を受賞

鈴木了二教授(苗S43・院S52)が「金刀比羅宮プロジェクト」により大隈記念学術褒賞を受賞され、2008年10月23日、授与式が執り行われました。今回の受賞は、古くから信仰を集めている神社「金刀比羅宮(香川県琴平町)で、既存の古い建築物や周辺の景観を保ちながら、神殿ゾーンなど既存の水

村松映一(稲門建築会会長/苗S38)

稲門建築会では総務・会員・事業・広報各委員長、大木事務局長を核に、建築学科創設100周年記念事業準備委員会を発足させ、学科教室は元より学生諸君との連携のもと、企画・立案に向けての活動をスタートした。記念講演会・シンポジウム、合同クラス会等を本年より順次開催するほか、100年史編纂や記念誌の発刊等の提案もあり、検討が続けられている。

時間や予算等の制約もあるが、教室・学生・OBが三位一体となって記念行事の企画・立案・実行に携わって記憶を残すことが、稲門建築会の絆をより強め、ひいては大学と社会との交流を促進

平地盤を拡張し、他にも新たに授与所・社務所・斎館(緑鞣殿)等を建築したことによるものです。

この賞は、創立者大隈重信を記念し、学術の振興を図る目的をもって設けられた学術褒賞制度です。本学の専任教員の個人または共同研究業績が対象で、研究上の業績が抜群であって、学術の水準の向上に寄与するところ極めて顕著なものに対して授与されます。

●過去の建築学科関連の受賞歴

今井兼次教授「アントニオ・ガウディの研究と一連の作品」(1962年度/奨励賞)

佐藤功一と早稲田建築の系譜

江戸東京博物館での講座を通じて

昨年10月23日(木)、「佐藤功一と早稲田の建築家」のテーマで、建築学科の中川武教授と対談する機会があった。江戸東京博物館で受け持っている講座「日本建築家列伝」の一環である。

今なぜ佐藤功一、そして早稲田建築なのか。今年2009年、早稲田大学建築学科は予科創立から100年となる。それを意識したのがもちろん第一の理由だが、常連受講生からの要望が多かったのも事実だ。これまでコンドルに始まり、辰野金吾、ライト、丹下健三といった建築家に関する講座を受講してきた生徒から、「早稲田の建築家をとりあげてほしい」「早稲田建築の創始者、佐藤功一の話を知りたい」という希望が多数寄せられる、これは望外の反応であった。「早稲田建築」という概念が、ひとつのカテゴリーとして、卒業生のみならず一般に受容され得る可能性を感じたのだ。

佐藤功一の多岐にわたる業績のなかでも、住宅の発見者としての一面はとくに重要だろう。柳田国男との親交を通じて「非名所としての民家」へと向かう視点は、「生活実践のかたち」としての建築学II住宅学の創始へと佐藤功一を導いた。建築学科創設間もない大正2年(1913)、佐藤は「住宅建築」を開設している。大学カリキュラムに住宅を導入するということは、日本初の試みであった。

その後佐藤は、自身の作品においても常に住宅に逆行する姿勢を忘れず、日照・通風を重視した快適な建築環境を探索し続けた。このような視座は、



早稲田大学建築学科の歴史 学科の歴史(建築学科HPより)

- 1882 東京専門学校創立
- 1902 早稲田大学と改称
- 1908 理工科新設
- 1909 建築学科創設
- 1920 理工学部と改称大学院設置
- 1925 早稲田大学図書館完成
- 1927 大隈講堂完成
- 1949 新制早稲田大学開校
第一理工学部建築学科
第二理工学部建築学科
- 1951 大学院修士課程開設
稲門建築会発足
- 1953 大学院博士課程開設
- 1967 理工学部校舎、大久保キャンパスに移転
- 1968 理工学部建築学科に改称
第二理工学部廃止
- 1993 理工学総合研究センター
(理工学研究所を改組)
- 2000 学部大学院6年一貫カリキュラム
- 2003 大学院建築学専攻開設

するよき契機となるのではないだろうか。会員各位の積極的な御指導・御支援を願っている。

安東勝男教授、穂積信夫教授、松井源吾教授、井上宇市教授「早稲田大学理工学部校舎」(1968年度/奨励賞)

池原義郎教授「早稲田大学所沢キャンパスの設計」(1988年度/記念賞)

中川武教授「アンコール遺跡の保存修復事業を通じて学術的功績」(2006年度/記念賞)

尾島俊雄教授「都市環境の解析・制御に関する実証的研究とその設計・都市政策への応用」(2007年度/記念賞)

米山勇(江戸東京博物館助教授/苗S63・院H2・博H5)

早稲田建築が誇る住宅建築の俊才たちを経て、今日まで受け継がれている。

佐藤功一は、明治36年(1903)に東京帝国大学建築学科を卒業、同43年(1910)、辰野金吾の推薦により、早稲田大学建築学科本科の初代主任教授に就任した。このことについて中川教授は、「東大において挫折したコンドル・辰野ラインの、自由でロマン主義的な建築家教育が、辰野の指名によって佐藤に託された」という重要な指摘をされた。佐野利器ら構造学者を中心とする合理的、体制的なものに重心を移しつつあった東大に対し、コンドル以来のロマン主義的建築教育を継承していく早稲田建築。佐藤の代表作のひとつ、早稲田大学大隈記念講堂(1927)は、その象徴といえる建物だ。弟子の佐藤武夫との合作であるこの名建築について、中川教授は「様式建築を基調としたものでありながら、それらの形式的な折衷ではなく、理想や宇宙への希求といった自由な精神への鼓舞を目指したロマン主義的建築」と表現された。

このような精神は、今井兼次、佐藤武夫、そして今日における早稲田のプロフェッサー・アーキテクトたち——音響学研究、作家研究などの学術的基盤に立脚した「知的ロマン主義」の系譜。創立100年を迎えるにあたり、佐藤功一から早稲田の建築家たちへと継承されてきたユニークな魅力を再認識し、広く外に向かって伝達していきたい——その思いは、対談を聞いた受講生全員に確かに伝わったようである。

上右：佐藤功一
上左：著書「住宅建築衛生篇」
下：佐藤功一が晩年に設計した栃木県庁舎(昭和13年竣工)



【座談会】

インフラにかかわる仕事

日本の社会基盤である電気、ガス、情報を支える3社において、今、建築出身者としてどんな業務に取り組んでいるのか？ インフラ関係の大組織で活躍する3人の方々にお話をうかがった。

●出席者……吉田 聡(東京ガス/苗S57)

中北英孝(NTTファシリティーズ/苗S60・院S62)

西村郁夫(東京電力/苗S62)

原田 仁(司会・広報委員会理事/三菱地所設計/苗S50・院S52)



なぜ、インフラ会社を選んだか？

原田●皆さんは、なぜ建築学科で学んだ成果をインフラ会社で活かそうと考えたのですか？

吉田●私は田村研究室で材料施工の出身です。最初は建設会社かなと漠然と就職活動を始めましたが、本当に自分の適性として建築関係の仕事をやりたいのかと考えていた時に、偶然東京ガスという設備系ではなく建築系の人間がほしいという話がありまして。ですから、残念ながらインフラ会社で自分の能力をどう発揮できるかという信念を持って入社したというわけではありません。



初は建設会社かなと漠然と就職活動を始めましたが、本当に自分の適性として建築関係の仕事をやりたいのかと考えていた時に、偶然東京ガスという設備系ではなく建築系の人間がほしいという話がありまして。ですから、残念ながらインフラ会社で自分の能力をどう発揮できるかという信念を持って入社したというわけではありません。

中北●私は昭和62年に井上研で修士課程を修了しました。当時はインテリジェントビルという名前が出始めた頃で、電信電話公社がNTTに民営化したばかりでもあり、今後いろいろなことが可能な会社のひとつだろうという認識を持って選びました。言い換えると、インフラ会社というイメージで入ったのではなく、建築的な要素の仕事ができる、しかもそれがITという今後市場性としても、また技術的にも広がりがある会社というイメージでした。



西村●私はあまり進路というものを深く考えずに大学3年生の後半を迎えました。ただ唯一、環境、設備については勉強した関係でインフラ系の会社を志望し、結果として当社に入ったという経緯です。地域開発などをしたという気持ちも若干ありました。

原田●現在はどういう部門にいますか？

吉田●環境部に所属しています。環境といってもかなり幅広く、いろいろなことをやっています。今、環境は地球温暖化問題で注目されていますが、非常に良かったと思うのは、これまで多様な部署を体験してきたことです。初めはエネルギー部門を担当し、途中で2年ぐらい都市計画を勉強し、その後管轄部門も体験しました。90年からは所有地である豊洲の都市開発マスタープランや住宅、大使館公邸の建設などに関わりました。現在の環境部は、都市政策とエネルギー政策、環境政策が一緒になっているような部署ですが、今までやってきたエネルギー、建築関係、都市計画関係

の知識が一番活かされる部門ですね。中北●私は今は設備設計ですが、これまではいろいろな部署を経験しました。最初は研究開発部門に入り、当時はNTTのネットワークのデジタル化を全国的に広げる時期で、デジタル交換機に合わせた空調システムの開発などに携わりました。その後、開発したシステムを実際現場に適用する設計部門に配属され、建物を日常的に保守する、あるいは中長期計画や投資計画を立てる部門、設備設計部門、NTT以外の設計事務所的な組織なども順次経験しました。



西村●今私がやっているのは、主としてポスト京都の国際制度づくりです。具体的な制度提案をするほか、国際産業団体、国際的な政府関係者、研究機関などと協議していくプロセスを進めています。温暖化防止の仕事は入社当初の送電部門などとはまったく性格が違いますが、この仕事に従事して15年目になります。

原田●中北さんは現在設計事務所の業務をされていますが、純粋な設計事務所ではないNTTという組織で、最初は機器の開発というメーカーに近い仕事、次に自社の施設の中長期計画策定といったデベロッパーの仕事などに携わってこられました。このように違った職域での経験が現在の設計業務に役に立ったというところはありますか。

中北●今でこそ分社化しましたが、当時は発注者であり、ユーザーであるという立場で、自ら使うためのシステム開発をしました。そういう感覚は純粋な設計者とは多少違っている部分があると思いますが、それが良いか悪いかは難しいのですが、例えばお客様の立場にスッと入れるという感覚はあります。空調機の開発についてもメーカーとの共同開発といった、ユーザーの立場で関わっていました。

地球温暖化問題とどう関わっていくか

原田●西村さんは建築出身としては特異なキャリアといえますね。温暖化問題には広範な分野の人たちが参加されていると思いますが、日本・海外を問わず建築出身の方は多いのですか。

西村●非常にレアなケースだと思います。温暖化問題は、元々、南極のオゾンホール破壊、原因物質であるフロンガスを何とかしなければいけない

News of Waseda Architecture

いということが発端になっていっているので、機械や化学などフロン削減から温暖化の世界に入ってくる人が多いようです。

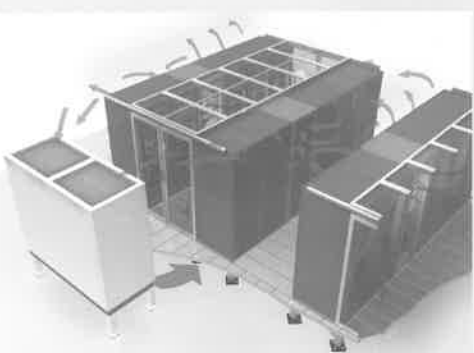
原田●インフラ会社は単独の建物よりも環境に大きな影響を及ぼします。そうした側面から会社または個人として、環境に対してどのような貢献をしていくと考えていますか。

吉田●エネルギーの面的利用は、京都議定書の目標達成計画にも掲載されており、日本ガス協会に出向していた時に経済産業省の勉強会で関わりました。エネルギー起源のCO₂の多くは都市で排出されています。個々の建物で設備更新の高効率化が図られてきていますが、街全体をもう少し大きく面的にとらえ、そこどのような仕組みを組み入れてCO₂を減らしていくかが課題です。また先進国で2050年までに60%、80%減らさなくてはいけないという状況では、ガスと再生可能エネルギーの組み合わせ、ハイブリッド型システムのようなものをエネルギー供給事業者として提案していくことになるでしょう。

地域、環境との共生、日本型の低炭素社会の構築に貢献できればと思います。日本全国としてアジア地域まで、日本型というと語弊があるかもしれませんが、アジア型の低炭素社会、環境共生型都市をライフスタイルも含めて提案できたいと考えています。

中北●NTTグループはネットワークを使うことで省エネを図ろうとしています。たとえばネットワークを使えば、出張に行かなくても済む。グループとしてはそのためのネットワーク網を張ることで環境に貢献できると考えます。ただ、サーバー装置など、そのネットワーク網自体が膨大なエネルギーを消費しているので、残念ながらNTTグループはCO₂を排出しています。その問題に本当に、今、取り組まなければ、というところでは。

西村●温暖化問題には、産業、発電、ビル、自動車、消費者行動という5つの分野がありますが、この中で自動車とビルの議論を進めていくと都市の問題に集約されていく。都市の問題は温暖化問題の議決点として議論されてきましたが、いくつかのパーツに分けて議論してきたことが、ひとつの問題として取り上げられつつあるのです。都市を語る際にはデザインとわれわれが担当しているインフラの視点がありますが、温暖化の議論では、自分の歩いてきたふたつの違う道がひとつになったような感覚を覚えます。そのような中で自分に何ができるかが、今一番問われている。ここにいる3人はとにかく売り上げを右肩上がり



IT装置用の空調システム概念図(NTT ファシリティーズ)

に伸ばせばいいという業種とは違うのではないかと、思います。

吉田●建物を設計している多くの卒業生は、省エネやカーボンマイナスに対してとても努力をしていると思います。しかし最終的なエネルギー消費による温暖化に目を向けたときには、電力会社やガス会社の供給するエネルギーの温室効果ガス排出係数(註)によってすべてが決まってきます。排出係数は日本全体で考えると非常に大きなウェイトを占めているわけです。インフラ会社の役割は極めて大きく、各社の努力が日本の温暖化ガス排出量や省エネに果たす役割を大きく支えている気がします。

また情報化の中でデータセンターでのエネルギー消費が加速的に増大していますが、従来型の空調ではなく新しい冷却システムの考案が必要です。N.T.Tも新たな省エネルギー冷却システムの開発を進めていると思いますが、そのようなインフラの仕事について教えていただけますか。

原田●建物におけるエネルギーを考えると、需要サイドでいっぴのようなエネルギー、空調、給湯、照明、動力がどれだけ必要になるか、またどれだけ効率的かが重要であって、そのエネルギーが都市ガス、電力、石油なのかは二の次の話です。すべてを同じエネルギー源で供給するという考え方もあるかもしれませんが、エネルギーには得意、不得意がありますので、用途に合わせて組み合わせる、本当の意味でのベストミックスで考えることが重要ではないでしょうか。一方で個々の企業がより効率的なシステムの開発を競い合うという協同、競合がより高効率システムをつくり上げていくのだと思います。都市計画、建築設計をされる方々と一緒になって、基本設計の段階から環境負荷を削減するにはどうしたら良いのかを一緒に考えてもらえるといいですね。

西村さんもいわれたように、日本のエネルギー産業は販売拡大により事業拡大を図る時代は終わったのではないかと思います。逆に高効率なシステムを普及拡大させることでエネルギー消費量を減らし付加価値が付くという考え、インセンティブが働くビジネスモデルに急速にシフトさせる必要があります。エネルギーの料金制度にはデカップリングというものがありません。これはエネルギー事業者が需要側でのエネルギー消費量を削減することでインセンティブが働くシステムです。東京電力やN.T.Tと協同し、その地域に合ったインフラデザインができればいいな、という思いがあります。

中北●私はデータセンターやネットワーク網などネットワークそのものを担当することはないので、建築の立場から、通信装置側の与条件に基づいた空調設備などのインフラ設備を提供してきました。

ただ最近単純に与えられた条件を基に「さあ、何とかしてくれ」では効率が悪い場合があります。たとえば、1ラック15kWのサーバーよりも4kWくらいのほうがかえて建築的なスペース効率が良いことがあり、建築も含めた全体をとらえた評価を行う必要がある。サーバーの発熱が大きくなると、そのための電力設備や空調設備の設置スペースが拡大し、せっかく省スペース型のラックを使っても、新たなスペースの必要が生まれてしまうことになり得ます。建物全体を考えながら一番効率的なのはどのような方法なのかと考えることが一番ポイントなのかなと思います。

西村●われわれの「社会自体が豊かでありたい」というビジョンは、皆さんと共通するものだと思います。基本的には「豊かさ」と、「豊かさ分のエネルギー」、「エネルギー分のCO₂」という3つの要素の掛け算で考えています。

豊かさ分のエネルギーとは、同じ豊かさを得るために必要なエネルギーはどれだけかということです。たとえば、同じ部屋の冷暖房をするときに機器の効率化をすれば、必要とされるエネルギーは当然減る。エネルギー1分のCO₂に関しては、電力会社として2020年までに非化石比率を50%にすることを掲げ、社会貢献を目指しています。化石を使うところは、すでに日本は世界的にも一番高効率ではありますが、さらに高効率化を目指していきます。

「建築」で身についた柔軟な思考が強み

原田●最後に、在校生やOBに向けて一言お願いします。

西村●在校生にいたいのは、模範的な学生でなくとも会社に入ったらいろんなことができる。どうしてもやりたいことがあって会社に入る人もいるでしょうが、漠然とした思いを持って会社に入る人もいます。そういう人は萎縮する必要はなく、逆にいろいろなことを経験していく中で思いが実現できていくのではないかと思います。今の世の中、あった仕事が無くなったり、それまでなかった仕事が出てきたりしますが、柔軟なものの考え方も重要だということを心に刻みながら、社会に出て行って欲しいと思います。

吉田●会社に入っておよそ四半世紀たちますが、インフラの会社も結果的に悪くなかったのではなかったかなと感じています。当初は、建築を出てガス会社に就職という「え、ガス会社に建築で入ったの?」といわれることもありましたが、建築をやっている、ひとつ良かったなと思うのは、建築の設計プロセスの考え方ですね。企業の中でも仕事の進め方でも、まずマクロで見えていき、それから個別に見えていくというプロセスはとても役に立っています。

建築というと、日本ではエンジニアのカテゴリーですが、世界的に見ると人文学の中に入ることが多いようです。建築は、事務系と技術系の間がいい位置にいてコーディネイトする存在であると思います。新しいものをつくりたいかなければならない時、そういう広い視野、柔軟な思考回路を持った人は大変に重要です。インフラ会社においても、いろいろなことができます。チャレンジ精神というところまでいかずとも、建築で学んだことを発揮できる環境であると思います。

中北●N.T.Tには経年40年程度の建物が全国に数多くあります。これらの施設の有効活用を考える際、いろいろな施策に対してライフサイクルといった切り口で技術的な評価を行う場面が多くなってきました。この技術的な評価に建築的な要素がより必要になると感じています。世の中には様々な建物インフラがあり、それをどのように有効に活用していくかという視点の中に建築的な力が求められる。この技術に関して、もっと高い評価が求められるのではと考えています。その評価を上げるように皆でがんばりたいですね。

吉田●日本では建築から都市計画の分野に入る人は多いと思いますが、都市計画を勉強しにアメリカへ行ったとき、アーバンプランニングに建築系の人はそんなに多くありませんでした。最初の授業で先生に「ここには建築や都市デザインをやってきた人がいるだろうけれど、君たちが都市計画、都市設計の中心だと思っていいたらそれは大間違いだ」といわれたことが印象に残っています。経済や法律を学んでいる人たちも集まってきて都市計画を勉強している。行政、市長までもが一緒になって議論を尽くしながら、人の住まう都市、人の働く都市をみんなで作っていくという視点に重きが置かれていました。すべてのステークホルダー(利害関係者)が集まって考えていけば、都市、建築はよりいっそう面白くなると思います。



原田●皆さんの活躍により日本の安全で高品質なインフラ網が充実していることが良くわかりました。ご多忙の中、ありがとうございます。

(註)温室効果ガス排出係数・建築から排出される温室効果ガスで、建設・運用・解体廃棄までのライフサイクルにわたって最も多くの比重を占めるのが、運用段階でのエネルギー使用です。温室効果ガスの中で最も排出量が多いのが炭酸ガスで、電気や都市ガス、油など1次エネルギーを使用する時に発生します。これら1次エネルギーはその製造段階の組成や効率などから温室効果ガス排出係数が決定され環境省などから公表されています。

広報委員会 小笠原昌宏(日本設計/苗57)

川田康介(撮影/修士1年・田辺研/苗20)

平須賀信洋(修士1年・田辺研/苗20)



東京ガスは環境保全活動の一環として自然との共生を目指している

国際競争力、エネルギー・環境に関するEUハイレベルグループ会議(東京電力)



長野・東京ガスの森マップ



「3年生設計製図共同課題」 「2年生共通課題」について

石山修武(早稲田大学教授/苗S・41・院S・43)

昨年引き続き、今年も3年生の第3課題を東京大学建築学科との共同課題にて実施した。正直なところ、昨年の共同課題は早稲田建築学生の近年の気力、体力、知力低落現象に対する危機感からスーパーカンフル剤はないものかと考えつめて為されたプロジェクトであった。スポーツにおける早慶戦を引くまでもなく、対抗戦には誰でも気持ちが奮い立つものだ。スポーツの世界では東京六大学戦を見るまでもなく東大は弱い。しかし、知力の世界ではこれは明らかに東大のほうが強い。これはいまさら言うまでもない。

では建築設計の分野ではどうか。建築設計デザイン分野は解りやすく言えば気力・体力・知力・芸術力がミックスしたものである。特に学生の設計製図は歴然としてそうだ、と考えたい。そして早稲田建築学生にもその自覚を促したい。

去年は体力、気力で押し切った感があった。今年の結果はどうか。素人眼には早稲田建築生のプレゼンテーションの一日の長によって再び早大優位かと思われたらどうだが、私は今年も東大がよく頑張ったと思う。私も成果を詳細に眺め、これ以上はないほどに良く検討した。そして今年も東大建築生のほうが良く考えていることに気づいた。その内容は石山研究室のホームページ上、「設計製図のヒント」に書き記しているの御参考までに。

世界中の名だたる大学の建築学科の学生の力を大方面で廻った。早稲田建築の3年生の力は超一流、歴然としてトップであった時期がある。ただし、しゃべらせなければ、だった。早稲田建築学生はデザインさせたら一流、しゃべらせたら一流は暗黙の定説であった。特に東大建築生と比較したらである。他の大学はどうということはない。まったく問題にすることはない。で、第1回の対抗戦ではきちんと説明できるようにトレーニングをさせた。徹底してやらせた。何かそれは曲りなりにもできそうにはなった。伝統というのは恐ろしいもので、第2回の対抗戦にもそれはすでに引き継がれていた。しかし、さすが、東大建築生にも、先生方にも、東大ダアという誇りがあったのである。この誇りの持ち方、これが早稲田建築生との不思議な違いになるのだ。彼ら東大建築生は良く考え抜き、その考えを純然と表現したのである、今年も。

私の率直な印象では2回の対抗戦を終えて、東大建築3年と早稲田建築3年とは完全に五分五分だかなと思う。それはしかし、将来の伸び代を含めて考えると少しばかり問題がある。4年生、大学院と年を経ることの伸び方を予想するに……?しかしながら問題は学生にあるのではない。むしろ、われわれ教師の側にあるのではないか。

今年も日本女子大学住居学科とも2年生の共通課題を実施した。時代は女性に風が吹いている。早稲田建築の村に閉じこもっているばかりではまったく

早稲田大学

VS

日本女子大学



早稲田大学 vs. 日本女子大学(2年生共通課題)2008.10.27

可能性は拓けない。女子大の女学生には女子大の良さが見事にあった。その可能性を、失礼ながら女子大の先生方が見抜いていないのかも知れない。若い学生にはそれぞれなりの可能性が皆あるのだ。あるいは気付いていても上手に学生の力を引き出そうとしていないのかも知れぬ。早稲田の教師にもそういうきらりがあるのかも知れない。他大学との共同課題、共同講評の効用はまず教師の意識改革にあるのではないかと痛感する。

近い将来には世界の超一流大学との共同課題共同講評の実施を実現するべく準備中である。

東大の武器

高橋忠輝(東京大学3年)

中間講評に臨み、デザインの完成度では早稲田大学に明らかに上を行かれていますと感じた。重量感のあるパスやテクスチャーまで、手の行き届いたいくつかの模型に衝撃を受けた。そして、それ以上に私たちが大きく驚かせたのは、動きのあるわかりやすいプレゼンであった。

われわれは前半の部分で早稲田に案の奔放さで負けないようにと、あらゆる可能性を上げ自由に取り組んだが、逆に現実性を欠く案になってしまった上に、プレゼンもデザインも未熟であると感じたが、建築の現在に縛られない姿勢は東大の武器になると感じた。

最終講評への東大校内での選考会は、いつも以上に厳しいコメントが飛び交った中、自由に可能性を描きつつも、構造の整合性、環境への配慮を合理的にひとつの論理の中に包含しているような案が10組選ばれた。

今回、東大の学生が課題全体を通して石山先生の「設計製図のヒント」に大きく影響を受けたように、石山先生をはじめ早稲田の先生方にも教えていただく貴重な機会を得たことを光栄に思う。

課題後、東大の学生の中には、早稲田の学生が見せてくれた模型やパネルの技法を模倣し、習得しようとする者もいる。互いが異なる環境の中で身につけてきたものを披露し合う良い場になった、価値ある体験だった。

合同課題の醍醐味

森藤文華(早稲田大学3年)

去年から始まった東大との合同課題。私自身、この課題を大変心待ちにしておりました。普段の校内のみに絞られがちな視野を離れ、他校の考えに触れることで、新たな刺激を受けるとともに、世代の中の自分たちの立ち位置を再確認できるものであると考えていたからです。

今課題は西葛西の敷地にメディアセンターを計画するA課題と、近接する団地へ自由にプログラムを組むB課題のふたつから構成されています。現代社会に対しての考えが求められるような難題でした。グループ課題であったため、メンバー同士で意見のぶつけ合いを重ね、寝食を共にし、課題へ取り組むこととなりました。そのような中、他人の思考を受け止め、自己の思考を主張し、混合し、時にはそれさえも超えた、新しい案が生まれてくることは、まさに今課題の醍醐味であったと感じます。また、学生同士でもグループ間のエクススを行い、まさに団体戦といった雰囲気の中、作品を作り上げられたことは、大変良い経験となりました。このような環境で私自身成長させられた、と仲間へ感謝の念を感じております。

東大福武ホールでの最終発表では、両校の作風の違いをはじめ、講評のお言葉などから、様々なことを考える契機となり、今課題の締めくくりが私にとってさらなる次の展望を垣間見るものとなりました。今課題に私たちがこのように取り組めたこと、すべてご尽力くださった先生方、TAの方々のおかげと存じます。ここに改めて感謝の意を述べるとともに、彼の大学と、このような親交が続いていきますことを願ってやみません。



早稲田大学 vs. 東京大学(3年生設計製図合同課題)2008.11.16

早稲田大学

VS

東京大学

Challenge to Convention

中村史郎氏

(日産自動車株式会社常務執行役員/チーフ・クリエイティブ・オフィサー)



2008年12月8日(月)、日産自動車のデザイン総責任者として、日産車すべてのカーデザイナーを任せられ、ゴーン氏とともに日産を率先牽引していく立場で活躍する中村史郎氏の講演会が行なわれた。小学校のころからノートに車の絵ばかり書いていた大の車好きで、現在、世界中を飛び回る氏の考え、生き方が熱く語られ、57号館201教室(階段教室)に集まった約150名の学生、社会人は2時間、多くの魅力ある話に聞き入った。

1974年に武蔵野美術大学(工業デザイン専攻)卒業後、いすゞ自動車に入社、その後米国のアートセンター・カレッジ・オブ・デザイン、トラストポルトデザイン修了。ヨーロッパ、アメリカで精力的にデザインを進め、デザインセンター部長に就任。1999年日産自動車にヘッドハンティングされ、デザイン本部長を経て、2006年から現職で活躍されている。

世界と日本の自動車づくりの歴史、デザインの考え方、進め方や、良いデザインは、いかに優秀な人をその気にさせることから始まる、などの話からスタートした。次に、建築と車のデザインの共通した点として、視覚的なことへの影響が最大であるがゆえに、両者とも社会に対する責任が大きいこと、そして内と外の関係をデザインすることが重要であること、つまり建築においては、インテリアデザインが外観に現れ、それが良いデザインになっていくよう、カーデザインもそうありたい、との考え方を強調された。

海外で生まれた自動車のデザインに、どのように日本のデザイン、感性を入れ込むか、そしていかに日本のデザインを海外の人々に受け入れてもらうかを、現在、大きな課題としている。左右非対称、ゆっくりとしたイメージ、合理性だけを追求しないなど、日本的な優れたデザインを大切にしている。さらに、それを日本人にだけでなく、より幅広く世界のデザイナーに求めることもある。自動車デザインは、今までの百年の歴史と同じくらい、今後10年で大きく変わってゆくであろう。電気自動車への急速な期待がデザインを大きく変える。そして、自動車ファンの期待を裏切らないよう、期待以上のものを創ることが求められている、と結んだ。

建築を学ぶ学生、建築界で活躍されている方々にとって大変意義深い、素晴らしい講演会であった。

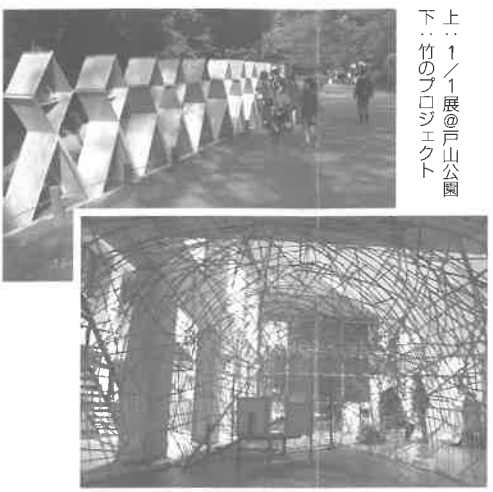
地主道夫(事業委員長/苗S48)

建築展'08

1/1人間展を終え

われわれは日々建築を通して社会を読み解く訓練をしている。課題と共に送る生活リズムの中で。実際これから社会に直面した時、われわれが提案しなければならぬのは、現実社会が必要としているもの、そのものみである。今、建築展を終えて強く実感している。

「建築的な模型」と「模範的な建築」。建築的な模型とは、敷地のない、つまり場所を必要としないモノだが、そこにはたとえばまるで物語を紡いでいくように人間を取り囲む空間を表現できたり、実験的な



上:1/1展@戸山公園
下:竹のプロジェクト

「しあう」

去る2008年11月1日(土)〜3日(月)、大久保キャンパスとSTEP21にて、芸術展08を開催し、学内外からたくさんの方に来場していただきました。来場者の皆様に喜んでいただけたことは、私たちが建築、都市デザイン、映像を学ぶ学生にとって大きな喜びであり励みになっています。

今年度の芸術展は他者との関係構築を強く意識した内容でありました。それは、ポスターとパンフレットに使用された言葉「早稲田には『芸術』がある。」と、芸術展08のテーマ「しあう」に端的に示されています。

他者と関わりを持つこととする時、まず私たちは自らの立場を明確に示すことを行いました。それが「早稲田には『芸術』がある。」です。一般に、早稲田には芸術がないといわれていますが、違います。早稲田には『芸術』があります。(後の講評会で、芸術だけではなく技術もあり、そして、『技術と芸術の包括』があるのだ、という指摘を受けました。ここに訂正します。「早稲田には『技術と芸術の包括』がある。」として、次にどのように関わりを持つのかということを示しました。それが「しあう。」です。この言葉には、学生と来場者が対等にコミュニケーションすることによって両者がより芸術展を楽しめる、または専門領域の枠を超えた横断的なチームによるプロジェクトの実行といったように、他者と包括的な関係を築こうとする意思が込められています。このような関係構築のあり方は、「私」と「他者」の間にハッピー&クリエイティブな状況をつくりだせる、と考えました。

芸術展08

制作を行うことができる。それに対し、模範的な建築とは3日間の仮想的なモノを場所に共振する形で配置し、出来上がったものを1/1という認識でとらえなおすことへの宣言である。「建築的な模型」では55号館アトリウムでの彫朔の実験空間への試み、事前に実施した八王子第十小学校でのワークショップのドライエリア関連展示、63号館でのロボワンステージ会場設計の3つを行う。「模範的な建築」では戸山公園で行った周辺地域団体をつくる「1/1展@戸山公園」、大久保キャンパスと大隈会館前両方に設置した木のバス停、戸山キャンパスカフェテリアで行った学生による「アートのスペース展」の3つを行う。

特に55号館アトリウムでの実験「竹のプロジェクト」は、家設計集団と協力し実際に北海道栗山町雨燧別で住宅を設計することとなった。竹を使うことで容易に自力で建設でき、有機的に空間を連続させるシステムを建築に取り込むのである。敷地はNPO法人雨燧別小学校が改修、再生した宿泊体験施設の「雨燧別小学校」カコーラ環境ハウスで、管理人の家とゲストハウスを兼ねた住宅を設計する。2009年7月に竣工の予定である。

今回の展示会開催に多大なご尽力を賜りました稲門建築会、佐藤先生、入江先生、高口先生はじめ諸先生、事務局の方々に心より感謝します。また本展開催に伴いご支援、ご協賛、ご協力くださいました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

斎藤信吾(建築展2008代表)



日常、私たちは異なる専門領域の中に、または異なる生活の中にそれぞれが分離、孤立しています。しかし、対話の積み重ねによって他者との包括点を見出せることが、今回、実証されました。この包括点とは、折衷ではありません。新しい創造、「集合からの創造」です。それは美しいハーモニーでした。すべての協力者に心の底から、ありがとうございます。

長谷則之(芸術展08実行委員長)

熱湯夜話

十三夜

(2008年10月6日)

環境とつながる、ひとつとつながる、
住まいづくり

語り部：山田貴宏(苗H2、院H4)

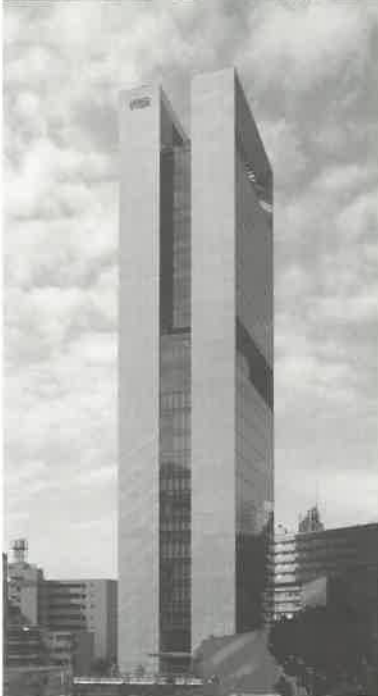
一級建築士事務所ピフォルム環境デザイン室代表

今回の熱湯夜話では、「畑がついたエコアパート」の設計を担当された山田貴宏さんにお話を伺いました。環境問題や食糧問題が叫ばれる昨今、都会において持続可能な住まい方の一スタイルを提案するこのプロジェクトは大変興味深いと思えました。経済性を考えると、このようなプロジェクトを成立させるのは困難であったと思います。プロジェクトの成功には、作り手側の柔軟な発想の転換



山田貴宏氏を囲んで

2008年11月21日午後3時から、同年3月に竣工した代ゼミタワーの特別見学会が開催されました。既使用中のため代々木ゼミナールとの最終調整に手間取り、見学会の告知期間がほとんど取れませんでした。30数名もの会員が参加しました。
代ゼミタワーは代々木ゼミナールの創立50周年を記念して建設されたもので、予備校と予備校生の住居空間を併設した複合建築です。
建物は校舎ゾーンを下部に、高層部に住居ゾーンを、その中間に空中庭園、展望レストランのアメニティゾーンを配した3層構成になっています。その高さは134mと、隣接する新宿の高層ビル群の中ではさほど高くはないのですが、周辺部に低層建物が多いことと、妻側の



代ゼミタワー OBELISK
 建築主：学校法人高宮学園
 設計：大成建設一級建築士事務所
 施工：大成建設株式会社
 工期：2005年9月～2008年2月
 敷地面積：3,508.66㎡
 建築面積：1,160.71㎡
 延床面積：2,7175.10㎡
 最高高さ：134.0m
 主要用途：専修学校・共同住宅

2008年度
 稲門建築会特別見学会
 代ゼミタワー
 OBELISK
 スリットを挟んだ垂直に伸びる細いスーパーステール(壁柱)が高さを強調していて、まさに創立50周年のOBELISK(オベリスク：記念碑にふさわしい外観です。
 見学会は1階ロビーに集合、7階の教室で設計者である大成建設の井内雅子氏よりレクチャーを受け、見学は住居空間が学生入居のため、

空中庭園、レストランのアメニティゾーンからスタートして、シースルーエレベーターと階段で移動しながら、さまざまな機能を持つ教室、学習室を見学し、集合場所である、3層吹き抜けのロビーに戻りました。その後、希望者は2組に分かれて地下基礎部分にある免震装置を見学し、最後に7階教室に全員が集まり質疑応答を行って、当見学会を解散しました。
 レクチャー、質疑応答を通し、「教室は室内環境をコントロールできる北側に計画し、代々木の森が見える南側に展望が効き開放的なシースルーエレベーター、エレベーターホールを配置した」こと、免震構造とその考え方、層間区画の取り方等、有意義なノウハウを聞き得た2時間でありました。(村上公一/苗S43/大成建設)

十四夜

(2008年12月15日)

手の記憶——実測とスケッチ

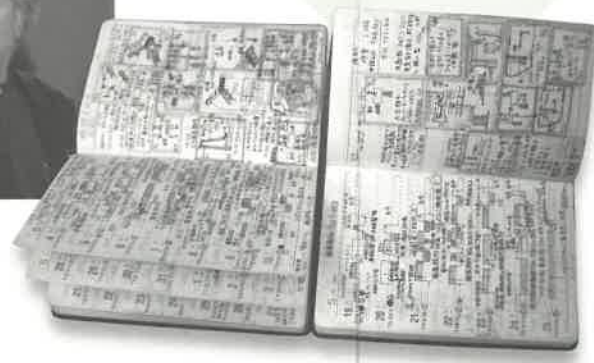
語り部：遠藤勝勸(友S29/遠藤勝勸建築設計室)

と、理解あるメンバー(特にお施主さん)に出会うチャンスが必要だと感じました。住宅産業においてはより多くの顧客を取り込む「市場拡大」が基本姿勢ですが、エコアパートの場合は、アパートの持つプラスアルファの価値がコストやメンテナンス性を越えて「良質の住まい手を選ぶ(環境問題に関心のある一部の層を取り込む)」という戦略を取っており、その発想の転換が新鮮だと感じました。また、エコアパートは、土地・資金・人が同時にうまく集められたことにより始まったプロジェクトだそうですが、このチャンスが巡ってきた時、山田さんには環境配慮建築設計の豊富な経験の蓄積があったからこそ挑戦が叶ったのだと思えました。講義を通して、面白いプロジェクトが舞い込んだときに率先して挑戦できる力を身につける種蒔きが重要であることを学ばせていただきました。
 竹内暉(修士1年/苗H20)

伝説的に語られているあの手帳を見せられていた時、学生一同からは感嘆の溜め息がもれた。遠藤先生の手帳は、単なる予定を書き込んだスケジュール帳とは異なり、食事や会議の座席表、宿泊先のホテルのプラン等、あらゆる記録が独自の形式で書き込まれている。実測スケッチも圧倒的だった。克明な描写もさることながら、本当にいろいろな建築を描かれている。建築史上の名作も、若手建築家の作品も、わけへだてなく接しておられることが伝わってくる。また、先生は、オープンハウスなどの機会には、絶対に手袋をしないというこだわりを持たれている。建築の感触を



遠藤勝勸氏(左)とその伝説の手帳



大切にされているためだ。そう聞くと、頑固な職人気質を想像されるかもしれない。だが、実測の際には、勘に頼ることなく、丹念にコンベックスを使って測られているのだから、それは当たらないとにたく、測ること、触ることを通して、等身大で建築と向き合い、身体に叩き込むことの大切さを教わった。濃密な体験談の節々から、遠藤先生の建築に傾ける情熱や信念が伝わってきた。とりわけ、終盤に笑顔でしみじみとおっしゃられた「建築はなにより面白いですよ」という言葉が私の胸に深く残っている。
 山口一紀(修士2年/苗H19)

OBによる 仕事紹介

大盛況



昨年12月13日(土)に開催された2008年度「OBによる仕事紹介」は好天に恵まれ、大盛況のうちに幕を閉じました。「OBによる仕事紹介」は「稲門建築会OBと学生が本音で語り合う場の提供をテーマに、建築学科教室と稲門建築会が共催する稲門建築会の目玉イベントです。

就職を控える学生にとって、様々な業種のOBの方々と直接本音で話ができる機会は大変貴重です。一方OB側も自分の働く業界や企業の魅力を、将来を担う後輩たちにアピールできる数少ない機会とあって、例年、学生OB双方から大好評をいただけてきました。今年度の盛況ぶりは例年を大幅に上回るもので、学生は約150名、昨年130名が、また企業別仕事紹介では43企業1自治体(昨年33企業1官庁)が参加しました。約100名の稲門OBが会場に所狭しとブースを並べ、学生と合わせ合計250名が参加した今年度は、本イベント史上最大規模の催しとなりました。プログラムは例年通りの3部構成です。第1部は、建築学科OBの社会活躍の全体像を知ってもらうため、57号館の階段教室で各業種OBが仕事内容をスライドを交えて紹介。横浜市西区区長の浜野四郎氏も講師としてご参加下さり、早稲田ならではの豪華人材による本格的講演会となりました。



第2部は、55号館大会議室と第1会議室に設けられた企業別ブースで個別面談できる催しで、話を聞きたい企業を事前にリストアップし、スーツ姿で臨む気合いの入った学生が多く見受けられました。一方、企業側も、説明用のパネルやブースの飾り付けなど入念な準備で学生を迎え、双方とも貴重な機会を十二分に活かそうと熱心に語り合う姿が見られました。立食形式の懇親会が行われた第3部は、総勢250名の参加者で大いに盛り上がり、最後は早稲田大学校歌の斉唱で締めくくられました。

川口 玄(学生理事・会員委員/苗H19)

討報

下記の方々が亡くなられた旨、事務局にお知らせいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 片山節義(苗S10) H20.8.4
- 関 節夫(苗S18) H12.9.19
- 森藤和夫(苗S19) H20.10.13
- 藤沢正二(苗S21) H20.7.17
- 鈴木市三(苗S26) H19.10.23
- 福田 尚(苗S27) H20.8.28
- 龍居 明(苗S27) H20.3.14
- 木村榮一(苗S28) H20.7.29
- 千葉公男(苗S28) H20.9.29
- 荒西義弘(苗S29) H20.8.7
- 藤原康雄(苗S29) H20.8.4
- 比田井貢(苗S31) H20.10.6
- 西村誠之(苗S34) H20.9.28
- 宮本孝雄(苗S35) H20.12
- 福村正久(苗S38) H21.2.11
- 石黒邦道(苗S46) H20.4.24
- 佐藤陽子(苗S47) H20.11.14
- 今井通雄(苗S48) H20.7.11
- 古屋敷貞義(苗S51) —
- 森島清太(苗S49) H20.3.3
- 江尻六輔(友S17) H20.8.29
- 稲井敏夫(友S29) H20.10.21
- 木村正勝(友S31) H20.3.28
- 石戸周造(友S32) H20.10.12
- 菅原昭夫(友S52) H20.8.19
- 小野文一(工S9) H20.3.5
- 加藤 清(工S20) —
- 花岡 巖(工S25) H20.10.21
- 大野誠一(豊S18) H20.4.30
- 斎藤好資(豊S24) H20.10.28
- 原 淳(芽S56) H20.4.23

(2008.10.27~09.2.18 受付分31名)

【報告】

2008年度 第2回稲門建築会 職域幹事会

2009年 新年会

1月28日の夜、「2008年度第2回稲門建築会職域幹事会」に続き、新年会が55号館1階会議室で盛大に開催されました。理事、職域幹事、一般の会員の方々と、総勢80名が出席されました。昨年より20名も多く、会議室が狭く感じられました。

村松映一会長の開会の挨拶で始まり、引き続き副会長の佐藤滋先生による乾杯で、懇談へと進みました。その後、佐藤先生から日本建築学会会長選挙への抱負と支援の要請がありました。また日本建築学会代議員および関東支部常議員に立候補された方々も出席され、抱負を述べられました。今回の立候補者は代議員6名、常議員2名で、佐藤先生とともに前に出て並び、皆さんから激励を受けていました。

当日はビール、ワイン、日本酒、焼酎と料理が豊富に用意され、皆さんグラスを傾けつつ、あちらこちらで会話に花が咲き、笑い声が響き、会場は大いに盛り上がりました。

後半は歌手・すがはらやすのりさんのコンサートというサプライズもありました。すがはらさんは稲門出身(苗S43・院S45)で、都市計画を専攻され一級建築士でもあります。このたびは2004年度の特別功労賞受賞のお礼とのこと、急遽参加されました。すばらしい歌声で「四季の歌」や「友よ」等、次々と歌い上げ、会場をわかせました。

その後、11月1日に開催される合同クラス会について、能勢修治実行委員長(苗S58・院S60)より挨拶があり、学生からは建築展の報告もありました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、まさに宴もたけなわ、といった状況ではありましたが、最後に学生理事の伊藤浩士君(修士2年/苗H19)の生まれて初めてのエール(ー)により「都の西北を全員で合唱し、当初の予定通り午後8時過ぎにお開きとなりました。」

関 洋之(会員委員会副委員長/苗S52・院S54)



上：大いに盛り上がった新年会
下：すがはらやすのり氏のミニコンサートというサプライズも

●主な会務の報告

- 2008年11月以降の主な会務を報告します
- 会務
- 第3回理事会…2008年11月19日
- 第2回評議員会…2009年1月21日
- 企画運営会議…1月21日
- 第2回職域幹事会…1月28日
- 特別功労賞選考委員会…3月4日
- 第4回理事会…3月4日

●活動

- メールマガジンの発行…12、1、2、3月号
- 第3回設計製図公開講評会支援…2008年10月27日
- 特別見学会代ゼミタワROBUSK…11月21日
- 日産力1デザイナー中村史郎氏講演会…12月8日
- 「OBによる仕事紹介」…12月13日
- 第4回設計製図公開講評会支援…2009年1月16日
- 新年会…1月28日
- 稲門建築ライブラリー公開懇談会内井昭蔵…2月14日
- 同、見学会世田谷美術館…2月14日

●事務局便り

3月は別れの季節であると同時に、新たな出会いが期待される季節でもあります。稲門建築会においても任期を務め上げた理事の後任を人選したり、次期会長を推薦したりする季節になります。今年は次期会長を推薦する年に当たりますので、これを機に歴代の稲門建築会会長のお名前を並べてみます。よくお世話になった、顔が浮かんでくる、活字でしか見たことがない、見る人によって様々な思いがあるお名前ですが、これも稲門建築会継続の歴史の一端を示すものであると思われまます。

- ①内藤多伸(S26) ②今和次郎(S35)
- ③十代田三郎(S37) ④今井兼次(S39)
- ⑤木村幸一郎(S41) ⑥田辺 泰(S43)
- ⑦鶴田 明(S47) ⑧南 和夫(S51)
- ⑨武 基雄(S53) ⑩竹内盛雄(S55)
- ⑪安東勝男(S57) ⑫井上宇市(S60)
- ⑬松井源吉(S62) ⑭谷 實信(H1)
- ⑮渡辺保忠(H3) ⑯田村 恭(H5)
- ⑰櫻井 清(H7) ⑱柴田寛(H11)
- ⑲尾島俊雄(H15) ⑳村松映一(H19)現在

(以上敬称略)

初代から16代までと19代は建築学科の先生が歴任していますが、17、18、20代と企業の方が務めておられるのが大きな特徴です。 大木紀通事務局長/苗S42

●編集後記

私たちが日帯回不自由なくしているのは、全国に張り巡らされた高度なインフラ網によるところ大いえます。今回座談会に出席いただいた3社はその分野で最大の企業であり、私たちの活動にも大きな影響を及ぼしています。建築出身の方々がその中で極めて重要な役割を担い、日本の国益に直結する仕事に就いていることに感銘を受けました。

昨年引き続き実施された設計製図共同課題では、東大、日本女子大と力比べを行ない、それぞれの特色を出し合い接戦となりました。学生時代から外に目を向け井の中の蛙とならないような機会をつくることは、早稲田建築が世界で通用するために必須と思えます。学生諸君の意欲と意識の高揚を期待します。

原田 仁(広報委員会理事/苗S50・院S52)

2009年春の大会のお知らせ

日時 5月27日(水)

総会・講演会・懇親会を開催いたします。詳細は別紙ご案内をご覧ください。出欠は同封のハガキで。